

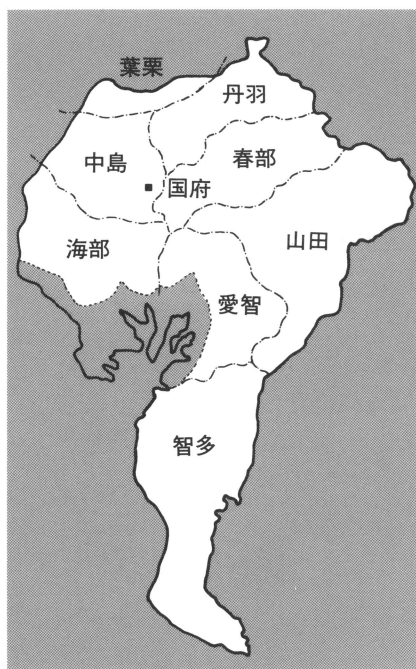
古代尾張をめぐる若干の問題

服部信博

1. はじめに

東西日本のほぼ中央部に位置する「尾張」は、その地理的条件もあって日本史上において何度となく重要な役割を果たす地域として登場する。例えば、…弥生終末期から古墳初頭にかけて邪馬台国と争った狗奴国を伊勢湾沿岸地域（特に「尾張」）に求める考えは最近話題にされることが多い。また、継体天皇即位に関してその強力な後ろ楯となった氏族のなかに「尾張」を支配下においた尾張氏がいた。そして何よりも中世社会を打破し、新たな時代を築き上げる原動力となった戦国の英雄織田信長は、この「尾張」を出発点として天下統一へと羽ばたいていった。…これらの時代については、古くより文献史学の立場から、考古学的にも発掘調査の増加により数々の論文が発表され活発な議論が繰り広げられている。しかしながら、ここで問題とした、古代の「尾張」に関しては、文献学的にも考古学的にみても史・資料が不十分なこともあって、その調査・研究は著しく停滞しているように感じる。

古代の「尾張」は、『延喜式』によると上国とみえ、海部・中島・葉栗・丹羽・春部・山田・愛智・智多の8郡から構成される。その領域は、現在とは若干の変動があるものの概ね、北・西は木曾川、南は伊勢湾（海部郡佐屋町～熱田神宮を結ぶラインが海岸線）、東は境川に挟まれた地域であり、地形的には、木曾三川によって形成された肥沃な濃尾平野域とその東部に広がる洪積台地および丘陵部とに明確に区分することができる。そしてこれらの地域には古代のエクメーネを伝える多くの遺跡が分布している。そこで本稿では、古墳、古代寺院、延喜式内社等の分布状況を概観し、さらに文献史学の成果を援用しつつ、古代「尾張」に関する若干の問題（とりわけ国府の設置に関して）を考えてみたい。



第1図 尾張国郡分置図

2. 古墳・寺院・式内社の分布

a) 古墳

「尾張」における大型古墳の築造・動向（第2図）に関しては、4世紀半ば頃尾張南部の海岸線沿いの平野部に奥津社古墳（前方後方墳？）・二ツ寺神明社古墳（前方後円墳）が、尾張北部の「東山道」筋の丘陵域に東之宮古墳（前方後方墳）等が築造され、「尾張」も本格的な古墳時代へと突入する。その後大型古墳の築造は、「尾張」東部の洪積台地・丘陵部を中心に展開していき、平野部における造営は現状では確認することはできない。造墓活動の主体は、概ね「東山道」筋を中心とした地域から、5世紀後半頃に庄内川中流域及び名古屋台地へと移動するかのような動きが認められ、6世紀初頭には「尾張」一帯を完全に掌握下におくかのようにヒエラルヒーの頂点として東海地域最大の前方後円墳である断夫山古墳が築造される。

続く後期群集墳・小古墳の分布状況は、第3図に示したように、基本的には大型古墳の分布と同様に引き続き「尾張」東部の洪積台地・丘陵部を中心に展開し、平野部における分布はほとんど認められない。しかしながら、大型古墳の状況と若干異なるのは、一宮市北部の犬山扇状地扇端部周辺（浅井古墳群）や瀬戸市を中心とした丘陵域（穴田古墳群他）等新たに群集墳が築造される地域が登場し、また、海部郡を中心とした当時の海岸線にそった地域にも僅かながらではあるが古墳時代後期の小古墳が築造されるようになる。

これら新たな地域への古墳の出現は、時代の進行とともに未開拓地域への開発が進み、エクメーネが拡大したことを示していると言えよう。

b) 古代寺院

「尾張」における7・8世紀代に築造されたと考えられる古代寺院跡または寺院跡の可能性のあるものは、第4図に図示したように現在までに41ヶ所ほど確認されている。旧郡別の寺院数は、海部8ヶ所・中島9ヶ所・葉栗3ヶ所・丹羽5ヶ所・春部4ヶ所・山田3ヶ所・愛智7ヶ所・智多2ヶ所である。

寺院跡の分布は、古墳時代の状況とは大きく異なり、ほぼ「尾張」全域で確認することができるようになり、東部の洪積台地・丘陵部から平野部への進出が顕著に認められる。とりわけ古墳の分布が著しく少なかった海部郡・中島郡といった平野部における爆発的な増加は注目に値する。

各寺院・遺跡出土の軒瓦の型式分類を手がかりに、梶山 勝氏が興味深い分析を試みられている。それによると「尾張」国内の白鳳期に属する寺院跡は、以下の大きく3つのグループに分けることができるという。

一つは当地方最古の寺院と考えられる長福寺廃寺を中心とした丹羽郡・中島郡・春部郡にまたがる「尾張」北東部グループ（素弁蓮華文の百済様式の軒丸瓦を使用）

二つ目は、「尾張」北西部の葉栗郡黒岩廃寺を中心としたグループ（複弁蓮華文軒丸瓦を使用）

三つ目は、「尾張」南部の海部郡・愛智郡・智多郡を中心としたグループ（様々な軒丸瓦を使用するが、同型瓦・同範瓦の分布から一つにまとめることができる）

これらグループの存在に関して、梶山氏は、軒瓦を含めた瓦の供給を通じての、経済活動の結びつきを示しているものとされ、それらグループの接触地域ともいえる中島郡に国府が置かれるのは政治的な配慮がなされたものと推定されている⁽¹⁾

c) 延喜式内社

延喜式内社（以下、式内社）は、延長5（927）年に制定された『延喜式神名帳』に記載された神社である。式内社は、長い歴史の変遷の過程で移動したものや廃絶したものが多々あり、その所在地に関しては確定されていないものが多く、分布状況を検討するうえで若干の問題を残す。しかし、この式内社は、確実に10世紀前半以前に存在した神社とみなすことができ、また、式内社の祭神のなかには古代氏族と直接結びつけて考えることができるものもみられ、古代の地方における勢力状況を推察するためには欠くことのできない検討対象であると言えよう。

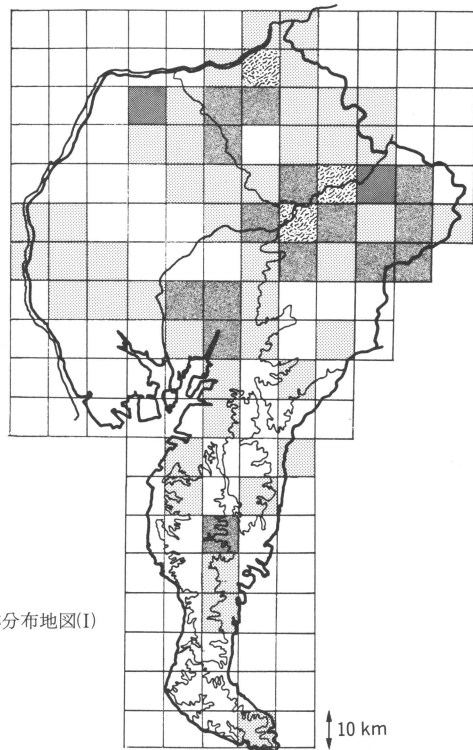
『延喜式神名帳』によれば、「尾張」における式内社は、第5図に図示したように121座（大社8座・小社113座）を数え、ほぼ同地域にあたる参河の26座・美濃の39座に比して、異常とも言えるほどその設置数は多い。各郡別の式内社数は、海部8座・中島30座（大社3座）・葉栗10座・丹羽22座（大社1座）・春部12座・山田19座・愛智17座（大社4座）・智多3座となる。

この式内社の分布状況は、概ね古墳文化の展開が顕著であった地域とほぼオーバーラップする形で点在しており、海部・智多郡といった海岸部に面する地域には比較的その分布は少ない。しかしながら古墳時代の状況と決定的に異なるのは、最も古墳の分布が希薄な地域であった平野部の中島郡への大量進出であり、30座という式内社の数は他郡のそれと比較して圧倒する。古代寺院の分布のあり方と同様に興味深い。

3. 古代尾張をめぐる若干の問題

前節で、「尾張」における古墳・古代寺院・式内社の分布状況を外観してきた。その分布状況を簡単にまとめてみると以下ようになる。古墳の分布は、概ね「尾張」東部に広がる洪積台地域を中心に展開しており、平野部への進出は顕著ではなかった。それに対し、

第2図 大型古墳分布図



※後期古墳の分布図は、愛知県教育委員会 1986『愛知県遺跡分布地図(I) 尾張地区』及び各市町村分布図等を参考とした。

第3図 後期古墳分布図

▶ 第4図 古代寺院分布図



※古代寺院の分布は梶山勝 1992「尾張の古代寺院と瓦」
『古代仏教東へー寺と窯ー』を参考とした。



- 所在地がほぼ確定している式内社
- △ 複数の候補地がある式内社

※式内社の分布は、式内社研究会 1989『式内社調査報告
第8巻尾張国』を参考とした。

第5図 延喜式内社分布図 ◀

古代寺院・式内社のそれは大きく平野部に進出してきており、古墳と古代寺院・式内社の分布とに見かけ上大きなズレを認めることができる。これは、当然、古墳と古代寺院・式内社との間に時期差のあることを示唆しており、時代とともに進行していった開発の波は、居住域及び生産域を拡大させ、古墳時代に形成された地域間の枠組みを変化させていった状況を物語っているものと考えられる。

しかしながら、先に示した4枚の分布図（第2図から第5図）を詳細に眺めていくと、基本的には古墳文化が発展した地域においては、引き続き古代寺院・式内社が造営されており、分布上のズレはほとんど認められない。例えば、「尾張」において逸早く古墳文化が展開した「東山道」筋にあたる丹羽郡や6世紀初頭に東海地域最大の前方後円墳である断夫山古墳を出現させた愛智郡等は、繁栄に比例するが如く古代寺院・式内社ともにかなりの数が築造されているのである。分布上大きく相違するのは平野部に設置された中島郡である。中島郡では古墳の分布がほとんどみられないのに対し古代寺院・式内社は「尾張」国内で最も多く築造され、全く対称的とも言えるほどの様相を呈している。この中島郡における状況がそのまま4枚の分布図における見かけ上のズレを表示することになった。それは、何よりも中島郡に国府・国分寺といった中央政府の重要な施設が設置されたことと無関係ではないであろう。

「尾張」の国府は、『倭名抄』によると、「国府在中島郡」と記されている。その所在地に関しては、江戸時代以来、種々の説が出され、近年、稲沢市教育委員会による発掘調査も実施されてはいるが、未だ確証となるものは確認されてはいないようである。しかし、現在の稲沢市周辺（中島郡）に設置されていたことは動かし難い事実であろう。また、国府の設置年代に関しては、史料不足もあって判然とはしないが『日本書紀』天武天皇元年（672）の記事に、2度にわたって尾張国司に関連する記載が登場する。この記載よりみて遅くとも672年以前に国府が設置されていた可能性を十分考えることができるであろう。

国府の設置に関して、野村忠夫氏は以下の二つの要因をあげて説明される⁽²⁾一つは、国司の持つ機能を円滑に満たすことができる地域に置かれた…安定した立地条件・防御機能を果たす・交通の要所…。二つ目は、在地の豪族との関係、律令体制内における役割等を配慮して設定された。前者は地理的な要因、後者は政治的な要因と言えようか。

この野村説に基づき、「尾張」国府が設定された地理的・政治的側面を概観してみたい。

まず、地理的な側面について。国府が置かれた中島郡の周辺は、中小河川が網の目のように走り、それに伴う自然堤防の発達も顕著な地域である。その点よりみれば確かに安定した地形と考えられようが、現在確認できる三宅川周辺の自然堤防の形成は、鎌倉時代以降のことであり、国府はその下層に発達する幅狭の沖積上部砂層に立地しているという井

関弘太郎氏の研究成果がある⁽³⁾また、国府設定以前の古墳の分布状況は、先に指摘したように東部の洪積台地・丘陵域を中心に展開し、中島郡を中心とした地域にはほとんど確認されていないという事実がある。このことは、平野部よりも東部の洪積台地・丘陵域の安定性を強く示すものであり、沖積上部砂層上に立地するとはいえ、相対的に、国府の立地を考えた場合、絶好の地とは言えないのではないであろうか⁽⁴⁾防御的な面も平野の中央部に位置しており良好な場所とは思えない。しかし、従来から国府設定の要因として強調されてきた三宅川を利用した水運の利便性は絶好である⁽⁵⁾陸路に関しても当時の主要街道であった東海道・東山道よりは遠く離れてはいるが、この両主要道をつなぐ街道沿いに国府が設置されており、水・陸ともに交通の要所であったとは言えるであろう。

次に、政治的な側面について考えてみたい。古墳時代の「尾張」には、かなりの数の豪族が蟠踞していたことが文献史料等よりみてとれる。なかでも尾張（連）氏は、「尾張」国造として巨大な支配権を振っていたことは改めて記すまでもないことであろう。ここで注目したいのは大化改新以降の尾張氏の勢力である。この時期の尾張氏の勢力を伝える史料は乏しいが、愛智・海部・春部・中島4郡の郡司に任命されており、引き続き国内最大の豪族としてかなりの勢力を有していたと考えられる。井上光貞氏は、この時期の国司と地方豪族の関係について、「国司と、郡司ないし郡司級の地方豪族との関係において、顕著にみられる一つの特徴は、国郡司制がすでに整っていたのにもかかわらず、国司があまりにも弱体で、郡司や郡司級の地方豪族を真に把握していなかったことである。」と指摘されており⁽⁶⁾それを具体的に示す事例として壬申の乱に功績のあった尾張国司小子部連鉏鉤の自殺事件をあげられる⁽⁷⁾この指摘より、大化以後、国郡司制が成立していたにもかかわらず、「尾張」の政治的実権は、尾張氏が握っていたと推定できるであろう。

以上、「尾張」国府が設定された中島郡の地理的な様相及び政治的な背景について概観してきた。これに4枚の分布図からみられた状況を加味して、何故中島郡に「尾張」国府が設置されたのか類推してみたい。まず、第2・3図に示した古墳分布図が、基本的に地方豪族の勢力を現しているとする、この分布図から、「尾張」東部の洪積台地域を中心に有力豪族が勢力を延ばしていた状況が考えられ、それを裏付けるように、尾張氏・丹羽氏等の豪族はこれらの地域を支配下に置いていたことが文献史料から明らかにされている⁽⁸⁾とすると、古墳分布が希薄な中島郡には、強力な在地勢力は存在せず、新たな勢力が入りやすい環境であったと推定することができ、寺院分布で梶山氏が指摘した複数の系統の瓦が錯綜する状況⁽⁹⁾は、それを端的に示していると思われる。これを当時の政治的な状況と重ねあわせ国府の設定を推定してみると、以下のようになる。

大化以後、国郡司制の成立により、国府設置の必要性が生じる。しかし、「尾張」国内に

において立地的に安定した東部の洪積台地上は、尾張氏を中心とした有力豪族が蟠踞しており、直接的に台地部に入り中央集権を行使するのは困難であった。故に、中央政府はそれらの有力豪族と一定の距離を持ち、その動きを牽制することができる地域に国府を置く必要性が生じ、在地勢力が希薄で、新たな勢力が入りやすい環境にあった中島郡に国府を設置することになったと想定することができるのではないであろうか。また、この地域は、従来、指摘されてきたように水運の利便性は絶好の地であった。

4. まとめ

前節で4枚の分布図を基にして、「尾張」国府の設定について考えてきた。従来、国府の中島郡設置に関しては、三宅川水運を利用した交通の利便性のみが取り上げられてきた。しかしながら、国府は中央政府が地方を支配するうえで最も重要な任務を得た官衙であり、その進出にあたって当然地方を支配する旧豪族層との関係は無視できぬことであったであろう。「尾張」国府の中島郡設置は、単に交通の利便性という一要因のみではなく、尾張氏という絶大な勢力を有した在地豪族との関係を配慮した極めて政治的な色彩の強いものであったと推定することができるのではないであろうか。

最後に、森 勇一氏、赤塚次郎氏、蟹江吉弘氏、山中 洋氏には多くの御教示を頂いた。記して謝意を表したい。

註

- 1) 梶山勝1992「尾張の古代寺院と瓦」『古代仏教東へー寺と窯へー』
- 2) 野村忠夫1970「国府と国分寺」『古代の日本』6 中部
- 3) 井関弘太郎1983『沖積平野』
- 4) 全く不安定な土地であったわけではなく、沖積上部砂層上に古代寺院・式内社が多数設置されていることより、ある程度の安定性は認められるが、東部の洪積台地上の安定度に比すれば、絶好の地とは言えない。
- 5) 水野時二1971『条里制の歴史地理学的研究－尾張・美濃・越前を中心として－』
- 6) 井上光貞1965「壬申の乱－とくに地方豪族の動向について－」『古代史講座』11
- 7) この事件は、尾張国司が壬申の乱に大海人皇子方へ参加し功績をあげたにもかかわらず、乱後に自殺してしまったものである。井上氏は、これを尾張国司が自主的に大海人皇子方に参加したのではなく、周囲の事情（在地豪族：尾張氏）により、やむなく決断したためであるとされる。註6文献。
- 8) 新井喜久夫1969「古代の尾張氏について」『信濃』21巻1・2号
- 9) 註1に同じ